

顔の中の日常

若い女たちの群れ 1

丸岡俊行

彼女は、その時、微笑んでいた。

美也子はエスカレーターで上がって行く。

郡山駅前のそのデパートは、昼過ぎのこの時刻、そう混んではない。

美也子は売り場の前をいくつか通り過ぎて、化粧室に入った。

手を洗い、溜息をつく。

コンパクトの中に顔が映っている。

目の前に大きな鏡があるのだが、美也子はそれを信用していない。

嘘があるように思う。

どこがどうとはわからないが、本当の顔や姿が映ってはいないような気がする。

もしかしたら思い込みで、真実かどうかは知らない。しかし、美也子はそう信じている。

だから、全体のバランスを見分ける時以外、美也子はそれを見ない。

思い付いて、口紅に人目を引くほどあざやかな紫を使ってみる。美也子は自分の唇の本当の色が好きではない。くすんだ感じで、はつきり言って病氣のように見える。全体に顔立ちが破綻がないかわり、男性を魅惑するポイントがない。だから、ときどき冒険したくなる。ただ、色は赤より、紫の方を好む。ただし、持ち物には、赤、それもひときわ目につくような赤が多い。目立ちたがり屋なのかもしれない、と美也子は自分で思う。

髪を直す。

水を流す音。ドアの音。ペーパータオルを使う音。出てくる。

知り合いと挨拶を交わす。

売り場に行き、会話を始める。何を話しているのかはわからない。

エスカレーター。

降りてくる女。

向こう側、女がエスカレーターで上がっていく。

彼は、その頃、エスカレーターで2階から3階へ上がっていた。美也子との待ち合わせにはまだ少し間があった。その時間を利用して、久しぶりにこのデパートに入り、上の階の方を覗いておこうかと思っただけである。そのとき、女が3階から2階へ降りてきた。彼はびくつとした。ちようど思いがけない地震で室内が揺すられたときの身も世もない感じ、胸をかきむしられるどきつとした感じだった。

麻理だった。

憑かれたような表情をしている。唇を鮮やかな赤に染め、ベージュのレインコートに身を包み、短めの真つ赤なブーツを履いていた。

彼は目を釘付けにして見とれた。

惚れるというより、理想の人を見てしまったショックだった。

麻理はこれから行こうとしている日本料理店に勤めている。今日は休みを取ったのだろう。何度か商談の流れで行って見かけた記憶がある。

着物も似合っているが、今日の洋装は格別だった。髪型も、店ではアップにしているが、今日は自然に肩先に流していた。化粧も違うのかも知れないが、そこまではわからない。まるで別人だった。

麻理は、当然のことながら、彼には気がつかなかった。

客として、彼はしゃばりではないから、スタッフの記憶に残るほうではないはずである。

美也子は電話をする。誰にかけているのか、時々、微笑みながら話す。それから、ウィンドウショッピングをする。

お昼を食べに店に入る。

一番奥のテーブル席に座る。

彼が来る。

挨拶する。

会話をする。お互いの近況とか、いろいろ。

定食が来る。牛肉の網焼き定食。食べる。

唇の間に、肉が、肉汁が、サラダが入っていく。

コーヒーが来る。すする。カップを持つ右手の指は細く、しなやかに折れ曲がっている。突然、いさかい。二人の口元と指と肘。怒りが充満している。

彼は電話に立つ。

美也子はトイレに立つ。

美也子が目配せをする。

彼が先に店を出る。美也子が支払う。

夜。美也子の部屋。ベッドの中。美也子がフェラチオをしている。音がしている。

彼は、ほとんど無表情。

やがて、挿入を経て、美也子が彼の上になり、動き、いくばくもなく、背を反らせ、果てる。やわらかに、彼の体にしがみつく。乳房が彼の胸で押しつぶされ、乳首が横を向く。

彼は美也子の胸が温まっているのを感じるが、まだ終わらない。美也子の脚を広げ、激しく、前後に動く。美也子は、苦悶する。

しばらく試みたが、結局、彼は終われないまま、やめてしまう。美也子から降り、局部をテッシュペーパーで拭く。

「どうしてこんな恥ずかしいことしなくちゃいけないのかしら。」

美也子がうつぶせでぼつりと言う。

彼は答えない。

美也子が彼にしがみつき、激しくキスをする。

上になって、彼を入れ、体をのぼし、ゆっくり動く。いく。

美也子はぐったりする。そのまま、彼にもたれ、動かない。

やがて、二人はそれぞれの布団に潜り込む。彼は横目で時計を見、目を閉じる。

会社で、彼が上司と打ち合わせをしている。

長い会話の後、デスクに戻り、モニターの画面に見入る。

昨夜の美也子の乳首を思い出す。

うす闇の中に美也子の肌が浮かび、乳首が浮き出る。まわりに視線を走らせ、若い女性社員の中を見る。

ふと、今夜は金で買える女を抱いてみようかと思う。

たまには他の女もいいじゃないか、と思う。

そうした女たちは皆普通の女たちで、アルバイトで抱かれるだけだし、若く、きれいな娘が多い。たいてい、お金をためて、商売を始めるか、普通のお嫁さんになりたいと思ってい

るらしい。深夜のテレビはそうした女たちを次々に紹介している。

彼は仕事に戻る。画面は、財務ソフトを映している。

どこかで電話が鳴っている。誰かが受話器を取り、

「はい、営業一課です。」と言っている。

彼は画面を新商品の開発のためのデータベースソフトに切り替え、ファイルを交換しながらポイントをまとめてゆく。かたわらではビデオが再生されて、想像力をかきたててくれている。

一週間後、新商品の企画書を書き上げる。

プリンタから原稿が印刷される。

彼はそれを持って上司のところに行き、打ち合わせを始める。

美也子は部屋で昼間着ていたスーツを脱ぎ、鏡を見、髪を見つめ、それからストッキングをまるめ、取り、ふくらはぎを叩く。買ってきた材料の下茹でをしながら、自分の下着と男の下着類が入った洗濯機を回し、浴室に入る。

このごろ、目尻に小皺が出来てきた。

ビデオが巻き戻されている。数字が減っていく。巻き戻しの方向を示す薄青の矢印が薄暗い部屋の中で光っている。

電話を切った後のツーンという音。彼は受話器を戻す。（美也子との実りのない会話。女を抱きたい）振り向いて、街角から、暗い横町に曲がっていく。看板のライトがほんのりと明るい。風が少しある。樹木の葉が揺れている。

若いカップルが彼のそばを楽しげに通り過ぎていく。女は小柄だが、めかしこんでいる。男は背が高い。女は男を見上げ、微笑んでいる。彼はそれをかすかに目の隅に止めながら歩いていく。唇の端がゆがんでいる。

どこかでサックスの音がしていた。